

令和7年度 一般選抜公立大学中期日程 経済経営学部 小論文  
出題の意図と解答の傾向

第1問

【出題の意図】

これから大学で経済学を学ぶにあたって、市場主義的な考え方については当然学んでいくことになるが、そうした考え方だけで現代における社会問題を解決できるわけではない、ということにも思いを馳せてほしく、本題材を取り上げた。

現代における主要な社会問題は出題文中にもある通り、サステナビリティという理念のもと、将来世代への我々の責任として対処されるべき課題であり、それは従来の市場至上主義的な経済イデオロギーによって破壊されてきたものを回復しなければならないという責任である。利益追求社会への懐疑の念や社会問題の解決という「大義」の実践のあり方について、本学を受験する者にはしっかりと考えていただき、これからの大学生活を送っていただきたい。

本問は本学科のアドミッションポリシーにもある通り、経済学や経営学への興味・関心、課題解決を行うための基礎的な思考力・判断力と、自らの考え方や意見を他者に論理的に伝えるための基礎的な表現力、地域や社会の動向への関心を多面的に測ることを意識して作成した。

各設問におけるポイントは以下のとおりである。

設問1は「(後述する)現代に主要な社会問題」＝「現代における最も重要な社会問題」＝「サステナビリティが意味する現代の社会問題」として、最後に集約されているので、ここを抜き出せばよい。

設問2は直前の段落に、「経済学の講義においては～」と、どのような教育がなされているのか記述があり、それは「市場至上主義イデオロギー」であり、それはマンデヴィルの考え方やスミスの見えざる手の概念として前段で説明されていることである。これらを基に解答を作成されたい。

設問3については、筆者は設問1の該当箇所の直後に「利己心と見えざる手だけでは、これは解決されない」と明確に述べている。つまり、設問1の問題は設問2のスタンスでは解決できないということである。こうした問題の解決に際しては「意識的に」「サステナビリティの大義を持って」関与する必要があると述べている。しかし、大義の実践には困難が伴うことも前段で示しており、その理由として「私利私欲を超えた公共の利益に自ら持続的に関与させ、公共への高い忠実を維持することは並大抵のことではな」く、また、「個人の社会貢献は思ったほど大きな成果を生まない」ことなども示されている。そして、「大義の実践には(このような)組織づくりの役割がとても大きい」ことを意見として表明している。こうした筆者の意見を踏まえたうえで、受験者個人の考えを明確に理路整然と述べることが期待される。もちろん筆者の意見を鵜呑みにする必要はなく、受験生自身の意見を説得力のある文章を持って書けているのが評価のポイントとなる。

### 【解答の傾向】

設問1については「抜き出しなさい」という指示にもかかわらず、継ぎ接ぎしたり、要約をしたり、不要な記号を付けた（最後に句点を付けるなど）……という解答が多く見られた。正確に抜き出したものはわずかであり、しっかりと問題文を読めてない受験生が多かったのではないと思う。問題文の指示には忠実に解答を作成するようにされたい。

設問2については、「ステレオタイプ化された経済学のスタンス」、つまり「世間が思っている経済学ってこんな学問だよ」というある種の偏見がどのようなものか（どのようなものと筆者が考えているのか）を問うている。経済学についてこれから学んでいく受験生にとっては、未知の学問について聞かれているので戸惑われた者もいたのではないと思うが、ちゃんと本文を読めば解答のポイント（上述）はつかめたはずである。下線部の前後だけでなく、文章全体の構造を把握して、解答を作成されたい。

設問3についても、問題文の指示を無視しているような答案が散見された。問題文では「あなた自身はどのような行動をとる必要があると考えるか」という、受験生自身がとるべき行動を問うているが、社会的にこうすべきだ・こうなるべきだというような俯瞰的な視点での解答が多かったように思う。もちろんそうした視点も大事ではあるが、もう一段身近な、自分自身でもできる行動を考えて解答していただきたい。また、問題文では「筆者の意見も交えながら」ともあるので、筆者自身がどう考えているかまとめたうえで、それに対する自身の意見を書くというような文章構成で書くのがまとめやすかったのではないかと考える（筆者の意見について触れていない答案も多くあった）。600字という比較的長い文章を求めているが、全体の構成をもっと考えたうえで、読みやすい（理解しやすい）文章を書くよう鍛錬を積まれたい。

## 第2問

### 【出題の意図】

学力の三要素のうち「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価するために、近年の日本の経済と観光にまつわる図表等の数値から傾向や変化とその原因を読み取りつつ記述式で解答する小論文を出題した。問題に使用した資料は、国土交通省が公開している令和6年版の観光白書の「第1部 観光の動向」から抜粋したものである。

#### 設問1

日本の経済や観光に対する一定水準の「知識」をもとに、それぞれの図表に現れている傾向や変化を正確に認識し評価する「判断力」と、異なる図表の背後に横たわる経済現象を適切に読み取る「思考力」と、題意を満たす解答を字数制限内にまとめる「技能」を試す問題である。制限字数は200字と長いため、論点をただ列挙するのではなく、文章を論理的に構成しつつ明解に記述する「表現力」が必要となる。

#### 設問2

近年の日本の経済や観光の動向に関する「知識」をもとに、資料に関連する社会的事象を

自ら見つけ出して分析する能力と、その結果に基づいて建設的な提言を行う「思考力・判断力」と、それを字数制限内にまとめる「技能」および説得力のある論述を行う「表現力」を問う問題である。現在のインバウンド（訪日外国人旅行）にまつわる社会的な問題や課題への関心に基づいて自ら主題を提示し、それに対する自身の考えを導き出し、その理由を論理的に表現する総合的な能力が必要となる。

### 【解答の傾向】

7～8割の答案において、題意に沿って字数制限まで解答しようとする努力の跡が見られた。

#### 設問 1

資料 1～2 が経済の動向に関するグラフであり、資料 3～7 が観光の動向に関するグラフである。採点においては、できるだけ多くの資料を取り上げ、それぞれでグラフの傾向や変化をつかみ取り、それらを網羅した解答が高得点を獲得できるような基準を設けた。しかし、ほとんどの解答で、一部のグラフに限定して解答するにとどまっていた。論点を端的にまとめる「技能」や、複数の論点を統合する「表現力」が不足しているように見受けられた。それらを改善するためには、資料の要点を簡潔に抽出するとともにうまく組み合わせて表現する能力の向上が必要となる。

#### 設問 2

採点においては、資料 1～4 に現れている近年の経済の動向および観光の状況と、資料 5～6 に示されている最近の観光における変化を踏まえつつ、資料 7 をヒントに日本のインバウンドにおける問題や課題を見いだして、それらを解決するための提案を具体的に行っている解答を高く評価するような基準を設けた。制限字数の 600 字近くまで記述した答案のうちの 7 割程度が、インバウンドにおける地方誘客および地方部における消費拡大に言及していた。また、それらの半数以上が、地方の魅力を訪日外国人旅行者に伝えることを課題として設定し、その解決方法を提案していた。一部の解答では、さらに踏み込んで、地域の魅力を生かした高付加価値な体験ツアーの造成、交通サービスの確保・充実、多言語対応、観光人材の育成などにも言及していた。多くの解答に共通していたことは、最近のインバウンドに関する「知識」がそもそも不足しているため、建設的な提言を行うための「思考力・判断力」が十分に発揮されていなかったことである。日頃からニュースや新聞に目を通して、社会問題に関心を持つことが重要である。